

令和2年度 防衛大学校卒業式
國分 防衛大学校長式辞

本日、防衛大学校第65期本科学生420名、および理工学研究科、総合安全保障研究科の前期課程学生58名と後期課程学生10名が所定の課程を修め、卒業の佳き日を迎えました。

本年もカンボジア王国、ラオス人民民主共和国、モンゴル国、ミャンマー連邦共和国、フィリピン共和国、大韓民国、タイ王国、東ティモール民主共和国、ベトナム社会主義共和国からの留学生諸君が、本科で23名、研究科で6名、故国を離れ異国の地での厳しい修養の日々を乗り越え、卒業の日を迎えました。今後諸君たちは母国の平和と安全に貢献するとともに、日本との懸け橋としても大いに活躍して下さい。

防衛大学校の全教職員を代表して、すべての卒業生諸君に対して、心からの祝意を表したいと思います。学生諸君、卒業、おめでとう！

本日はまた、卒業生諸君を支えてこられたご家族・ご親族の皆様に対しましても、防衛大学校を代表して心よりお慶びを申し上げます。ただ、今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、ご来賓とご家族をお招きできず、映像を通じての中継となりました。誠に残念ではありますが、事情をご理解いただければと思います。

そして、卒業式に合わせて開催される卒業生のホームカミングデーも昨年度に続き延期となり、お迎えする予定であった防大第21期の皆様にも今年もお会いできないこと、残念でなりません。

しかし、このような厳しい状況の中、菅義偉内閣総理大臣と岸信夫防衛大臣のご臨席を賜ることができましたこと、我々にとってこれにまさる栄誉はございません。防衛大学校を代表して衷心より御礼申し上げます。また、ご来賓代表として、三浦瑠麗氏には後ほど卒業生に向けたご祝辞をいただきます。よろしく願いいたします。

さて、私事ではありますが、この三月末日をもって、九年間務めた防衛大学校長を退任することになります。試行錯誤の九年間ではありましたが、その真価が問われるのは、今の卒業生が自衛隊の中心となる10年、20年、30年後のことだと思います。後任の久保文明教授は私の親しい友人でもありますが、学問的にも人間的にも優れ、私も安心して防大を去ることができます。

私の人生の中で防衛大学校とその学生たちと出会えたことは、最大の喜びであり幸せです。防大は最高の学校です。私が繰り返し「世界一の士官学校」。これを語り続けたのは、それが夢ではないと感じていたからです。

本日卒業する第65期の諸君たちは、新型コロナウイルスに社会が大きく揺れる中で、防大の最高学年として責任感をもって下級生たちを指導してくれました。その結果、現段階において、校内では一人も感染者も出ていません。これは奇跡ではなく、強い意志と日常訓練の成果だという風に思います。素晴らしい学年でした。ありがとう！

在任中の九年を振り返ると、困難な事案にも幾度か直面しました。その多くは、閉ざされた空間と濃密な人間関係の中で暮らす学生たちの若者ゆえのエネルギーの副産物でありました。それらをどう裁定するか。理の基準だけで判断すれば結論は簡単ですが、人間としての情の部分捨象してよいのか、ずいぶん悩んだことも多々ありました。

数学者で哲学者のパスカルは『パンセ』の中で、「理性と情念のあいだの人間の内戦」。これについて語っています。彼は人間には理性と情念があるが、そえがゆえに、絶えず両者の間で葛藤し、分裂していると語っています。その悩みの淵から見えるひとつの解答は、単純な二者択一ではないということであります。情だけの世界は必ず腐敗し、理だけの世界は分裂をもたらす危険があります。要は、両者の調和のとれた均衡点を模索することだと思えます。

さて、防大離任にあたって私にとって最大の心残りは、任期中の九年間に帰らぬ人となった学生や卒業生たちのことです。お祝いの中ではありますが、この点について触れることをお許し下さい。

先月、アメリカ・アラバマ州で飛行訓練中に墜落死した植崎廉偲一尉、第61期の大隊学生長だった彼とは飲み会等で親しく付き合った思い出があり、穏やかな中に闘志を秘めた素晴らしい若者でした。卒業式の午餐会で、お母様が卒業生家族を代表して、「命にかかわる親不孝とも思えるこの進路を応援してくれて感謝している」と廉偲君が語ったお話を披露してくれたことが思い出されます。

山岳事故で尊い命を落とした植崎君と同じ第61期の沢辺元俊学生は慶應義塾高校の出身であり、そのまま大学に進学せずになぜ防大に挑戦したのか、それを彼に聞いたかったんですが聞けませんでした。彼を助けようとして犠牲になった小林剛士一曹は、新婚早々での事故であり、残された奥様のことを考えると言葉を失います。

フィリピンからの留学生であったベトン学生は、平成25年1月、冬期休暇で一
時帰国中、川で溺れた親族を救おうとして、逆に自身が犠牲になってしまいました。
結果は悲劇でしたが、彼はまさに学生綱領の一つ「真勇」によって防大精神を發揮
したのであります。

急性髄膜炎により一瞬に命を奪われた第65期内田大介学生は、本来、この場に
いるはずでした。今ではすべての新入生に髄膜炎のワクチンを接種しますが、それ
は彼の死が契機です。このあと行われる帽子投げには、ご両親のご希望で、彼の帽
子も一緒に舞うことになっています。

このように、若く優秀な逸材を志半ばで失ったことは未来への大きな損失であり
ます。しかし、彼らの志と思い出は防大卒業生たちの間で風化することなく語り継
がれ、皆の心の中で生き続けるに違いない、私はそう確信しています。

感性豊かな防大生諸君は、私がなぜこうした話を取り上げたのか気付いているか
もしれません。卒業式後、自衛官として「事に臨んでは危険を顧みず」と宣誓する
諸君達は、防大での教育と訓練を通じて死生観にも触れ、そこから生の崇高さを感じ
取っているからです。

最後に、私は在任中、心の中にひとつのコンプレックスがあったことを白状しま
す。それは、防大卒業生でもなく、日本で最も厳しい学生生活を経験したこともな
い私が、防大教育の何たるかを語り続けたことです。

ようやくそのコンプレックスから解放されることになり、正直少しほっとしてい
ます。もし生まれ変わることができれば、次回は防衛大学校に入りたいと密かに思
っています。合格すれば、ですが。

何はともあれ、第65期の本科卒業生諸君、ならびに研究科前期および後期課程
の卒業生諸君、本日は、国民の安全と平和を守り抜く最後の砦である自衛隊の幹部
を養成する唯一無二の最高学府を卒業すること、心からお祝い申し上げます。

改めて、卒業おめでとう！

「防大プライドを忘れるな！」

令和3年3月21日
防衛大学校長 國分良成